



アラント

ールマンディー
人のプロポIV
【2013年9月】

翻訳：高村昌憲

序

- 一 現代のエリート (NOTRE ÉLITE)
- 二 組織と方針 (ORGANISATION ET DIRECTION)
- 三 幼児語 (LANGAGE DE BÉBÉ)
- 四 ペダンチズム (PÉDANTISME)
- 五 戦争と情熱 (GUERRE ET LES PASSIONS)
- 六 (飼育)
- 七 (観察と教育)
- 八 (復活祭)
- 九 否定 (NÉGATIONS)
- 十 進歩 (LE PROGRÈS)
- 十一 (歴史の原因)
- 十二 (創造者)
- 十三 建て前と本音 (LA HORME ET LE FOND)
- 十四 愛と欲望 (L'AMOURET LE DÉsir)
- 十五 党派 (LES PARTIS)
- 十六 (不公平も礼儀作法)
- 十七 支持層 (CLIENTÈLES)
- 十八 精神文化 (CULTURE D'ESPRIT)
- 十九 有権者と党派 (L'ÉLECTEUR ET LES PARTIS)
- 二十 高級無気力者たち (LES HAUTS MOLLUSQUES)
- 二十一 芸術と簡素 (ART ET SIMPLICITÉ)
- 二十二 食べている馬たち (CHEVAUX MANGEANT)
- 二十三 文化 (LA CULTURE)
- 二十四 ランソン (LANSON)
- 二十五 精神生理学 (PSYCHO-PHYSIOLOGIE)
- 二十六 宗教と権利 (LA RELIGION ET LE DROIT)
- 二十七 機械の間違った概念 (NOTION FAUSSE DES MACHINES)
- 二十八 変わりやすい品性 (INSTABILITÉ DES MONEURS)
- 二十九 ユゴー、バルザック、スタンダール (HUGO, BALZAC, STENDHAL)
- 三十 私たちの未来 (NOTRE AVENIR)

序

若い牛飼は月が出て踊る時、月も彼と一緒に踊っています。その様に外観は私たちの運動に結び付きますが、私たちの気分も同じです。私はそれ故に、読者のあなたが満足するとかしないとか少しも気にしませんが、踊らないで貰いたいのです。私が書いた話には、極力、模倣したりリズムとか調子は少しも入れないようにしました。そして、もしもあなたがこの散文の調子に何時も苛立つのでしたら、一休みするのでしょうか。そのようにすれば、事物のイメージは決して踊りません。それが最初の勝者です。

しかし、あなた自身の意見、何よりもあなたが解明することは、内心の声の響きによって大変感動するようにもなります。従ってあなたが言うことは、取分けもしもあなたが力強く話せば、それを信じるのもそう遠くのことではありません。そうなるには沢山の理由があり、その最も内心のものは、言葉が最初は叫びであったということであり、胸の奥深い処の動きであり、それはあなたよりも強かったのです。言うてから思考することで証拠を探すのは恐らく雄弁家ですが、偉大な雄弁家はその様にして証明した物事が冒険によって真実になるか否かによります。しかし、それでは未だ月に踊らされるがために踊っているのです。それ故に声を低くして読んで下さい。それは二番目の勝者です。

しかし時間が流れて行くや否や、希望と恐怖が同時に襲って来ます。えっ、何時も走っているのですか。大河の船旅のように何時も事物に今日はを言うと、それと同時にさようならを言うのですか。しかし私の思考には、始めも真ん中も終わりも無いように気を配りましたし、出来るだけ結果は最小限にしました。もしも私が望めば、それらは大理石かブロンズの像になり、塔を造る時の立像のように取り残されてから再発見されます。それ故に喋らないで読んで下さい。そして出来ることなら眼で読んで下さい。それが三番目の勝者です。

(一九一四年五月二七日)

(原注) この序は、『プロポ百一章』第四巻のためにアランによって書かれました。この巻全体のプロポ集は、おおよそ一九一〇年三月から一九一一年十二月までの期間のものでした。

一 現代のエリート (NOTRE ÉLITE)

現代のエリートは何の価値もありません。こう言っても私たちは驚くことはありません。如何なるエリートも何の価値もありません。それは自然なことではありません。というのもエリートは最高のものを持っているのが自然であるからです。しかし、それは職務が最高なのです。権力の行使が予め定められているエリートは、その行使によって墮落させられるのも予め定められています。私は大体のことを話しているのであり、例外の人もおります。

農民の息子の考えを追ってみましょう。彼には計算の能力があり、リセの奨学金が給付されています。学問への能力を持った彼が、もしも感情的で野獣のような性格であったなら、十六歳頃には壁を乗り越えるとか遅刻をするとか、ついには時間を無駄にして、先生方を馬鹿にして、際限のない悲しみに陥り、自分を慰めるために酒を飲むのは眼に見えています。あなたは、慈善から働かせて貰っている地位の低い仕事をしている彼を、十年後にも再び見付けることでしょう。

しかし、彼の青春時代には嵐がなかったと私は思います、何故なら彼の情熱というものが野心でなくなり、彼の頭が胸や腹を支配していたからです。若者は多くのものを教わり、何でも構わずに大変早く学べるのであり、順番に次の仕事に慣れていき、そしてついに思想の力だけが最高の道徳になるのです。そのようなことは非常に良くあることで、合理的に行われる競争によって選抜された人々は、校長や視察官や検査官となって権力を補佐します。実際に彼らは本当の王であり、大臣になって行くのです。そしてこれらの未来の王は、大変に良く選択されます。実際に私たちは最良の人々を指名します。最良の人々は、公的な仕事に向かってあらゆることを上手く行っていきます。

少なくともエリートにおいては、腐敗は必然的に生まれ、最も腐敗した者たちから選ばれる者であることは理解しなければなりません。ここには幾つかの理由があります。第一は、高貴で堂々として激しく欺瞞のない性格が直ぐに中断されます。彼には管理する精神がありません。その次に、少し身をかがめながら最初の門を突破した人々は、決して立ち直ることがありません。裕福な結婚をさせられて、贅沢な生活をしてお金に困っています。事業に参加させられ、そして同時に悪知恵を教わり、それらによって議会や省庁を支配します。何らかの自由とか民主的意識あるいは何らかの思想的な信念を守りたい人々は、それを排除したり遅らせたりする多くの障害を見出します。二番目の門があり、三番目の門がありますが、駆け引き上手やお役所根性というものを十分に理解した古狐しか通れません。彼はそんな所に止まらず、昔からの美德である伝統や団結心や官僚的な連帯への確固たる忠実にしか止まりません。それらの残されている寛大や独創を、ついには年齢がすり減らします。それは彼らが王になる時です。そして小さな美德がない訳ではありませんが、大きな美德はすり減っています。国民は最早、彼の息子たちを認めませんでした。以上が、民主主義への努力には厳格な必要性がある理由です。

二 組織と方針 (ORGANISATION ET DIRECTION)

複雑で厄介な行為というものは、分業を前提としています、つまり各人が何時も同じ機能と同じ位置にあって、他のことには手を出さないのです。それ故に官僚主義が醸し出している、範囲を限定して割り当てている仕事には賢明さがあり、何時も他の処を決して侵害しないで行うように努力しています。少なくとも、それは仕事を単純化するのを目指して行っていますし、知性の重荷を軽くしようとしており、次に策謀や請願に力を尽くします。この側面から物事を把握すると、管理者は何時も組織の中で協同して働く業務であっても分割する傾向があります。一人ひとりはその時、最早自分の業務に応じてそれと一致した行為を示すことしかせず、それまで行われていた行為ではないとしても規定に合った行為です。つまりそうでなければならないが、他の人の行為です。「私は信号を停止にした」と信号係は言います。「私は信号を停止にせよと命令した」と駅長は言います。「私は規則に従って運転していた」と列車の運転手は言います。歯車一つでは、全体を働かせるのは不都合です。幾つもの歯車が、お互いに分からずに組織全体に及ぶことで小さな混乱が大事故になります。

労働の役割が、調整するための機能によって修正されなかったなら、最悪になるのが分かります。以下は間違いです。調整する機能とは管理職のことで、官僚的な原則によって制限された責任と共に制限された職務を行うことを主張したことです。これは非常識です。というのも管理職が一つの歯車そのものでしかなかったとしたら、管理された機能を持った管理職を調整するために他の管理職がいなければならないからです。一つの歯車では、時計を調整出来ないからです。

全てはここに戻ります。管理職を組織化することに戻ります、しかしこの思想に従えば、管理職の組織は労働の分割と全く反対になります。最高の指導者は調整するための機能と見做され、それ自体の職務は何もないと先ず仮定することであり、もっと正確に言うなら、従属された管理者にならなければなりません、つまり或る分割されたもので部分ですが、機能ではないのです。歯車としての一人ひとりの管理職、副支配人、視察官、検査官、所長は、部分としてあらゆる機能を支配しなければならず、部分として全てに責任があります。例えば視察官がいるとすれば百キロメートルのためである、と私は仮定します。彼は全てのもの、道、車で動く物体、時間に関すること、業務時間に注意し、この地方の調整業務に関して絶対的責任があり、又極めて限定された職務もなく、反対に権力は一杯です。要するに、様々な機能を持った組織は、その中であらゆるものを調整するために、調整者たちの階級化が行われるのですが、権力で一杯の階級化です。

。さもないと、私たちは衝突することになります。

(一九一一年二月二日)

三 幼児語 (LANGAGE DE BÉBÉ)

赤ん坊が空腹の時は匙でお粥が与えられ、赤ん坊は頭を上下にして頷きますが、まるで同意する元老院議員のようです。赤ん坊が頷くのは食べるからです。もしも反対に食べたくないなら、熱心に食べさせようと追いかける匙から逃れて盛んにいやいやを繰り返しますが、この行為には言語の起源を見ることが出来ます。

哲学者たちは何時も、人が話をするのは先ず何かを説明する意図を持っていたからであると言いたいのですが、赤ん坊は意図ではない一つの言語を私たちに見せています。それというのも、赤ん坊が匙でお粥を食べる時は、食べるのを望んでいることを知らせる意図はありません。赤ん坊は只お粥を食べます。あるいは拒否しますが、全くそれだけです。言語というものが一つの行為になっています。

私たちは両手で拒絶の動作をしないで言葉だけで拒むことはありませんし、何らかの食べ物を受け入れて食べる時も同じです。逆に、契約とか約束して会う時のように手を使わないことを同じ様に受け入れる時も、私たちは手を開いて差し出して握手を求めます。ここでは食料を食べるための匙はないのですけれども、私たちは単純な肯定に対して頭でも否定します。

手を合わせること、頭を下げることは奴隷になった人間の行為であり、鎖で繋がれていたいのです。自分にだらしなく檻を纏って不潔になるのは悲しみに打ちひしがれた人間の行為であり、最早余り生きる勇気がないのです。そこからユダヤ人の家では偉大な司祭が大衆の絶望を解明するために、儀式に関する行為に惹きつけていました。彼は服を引き裂き、灰を頭にかけます。そして膝をついて手を合わせて祈る善良な修道女は、自分自身を鎖に繋がれて叩かれるつもりなのです。

動物にも言葉がありますが、それは行為の連続でしかありません。激しく追い立てる犬は餌食を嗅ぎつけたり、足跡を嗅いで知らせてくれます。鞭を見ると地面に腹這いになるその犬は、自分の腹を守ることしかしません。恐れを抱く馬は逃げようとする馬です。

言葉も行為でしかありません。子供が空腹で喉が渴いている時、物を食べているかのように唇を動かしながら叫びますが、口の形からは殆どママ、ママと言っているようであり、誰かを呼ぶ意図がある訳ではありません。そこから最初に駆けつけた人に与えられたのがママン (母) という名前だったのです。勿論、それは幼児が付けた名前です。母親は声を聞いて駆けつけた時、その声が彼女の名前だったと結論を下したのです。子供は単にそれを縮めて覚えます。私たちは次

から次に言葉を子供に教えますが、私たちも先ず幼児の言葉を覚えなければなりません。そこから乳母のおしゃべりは幼児を模倣した言葉になります。そして、恐らく信じられない位に役立っています。

(一九一一年三月一日)

四 ペダンチズム (PÉDANTISME)

初等教育にありがちなペダンチズム (銜学者) について良く語られます。私としては至る所で銜学的な人々に出会いますし、至る所で自由な精神を持った人々にも出会います。ペダンチズムは他の教育よりも何故初等教育の方が心配であるのか、多分言うことが出来ます。それは理論を教える前に実践を教えるからであると私は思います。手の施しようがない病気です。

理解することとは、精神の自由と生き生きした動きのようなものです。人は悩み、見抜き、推測します。例えばきちんと設置された滑車で、一方のロープを引っ張ると何故半分の力で持ち上げられるのかを子供に説明した後で、同じ重さの物を大量生産方式で八分の一の力で持ち上げるように、幾つかの滑車と紐を子供に与えます。子供はやりたいことを覚え、模索し、思い切ってやり、上手く行って叫びます、「見付かった」、第二のアルキメデスのようです。それは彼が考えて試したのであり、教えて貰った知識ではありません。もしも反対に、彼に何の説明もせずに巻揚機の幾つもある滑車で上げてばかりいれば、記憶に残るものばかりです。つまり彼は動かないで、緊張して惨めです。利口な犬のように、ついには真面目になります。銜学の人が行動すると以上のようなのです。

この病に薬はありません。というのも記憶によって何かを完璧に知る時は、思考することが不可能であると私は気付いたからです。ロープのように思い出を引っ張ります。しかし、それは考察とも探求とも言いません。自動販売機の取っ手を勢い良く動かすように、「六掛ける四……、六掛ける四……」と記憶を機械的に言って子供が覚える時、二十四の数を本当に見付けているとは決して言えませんし、六つずつ四回の結果を考えることもありません。考えませんが、やるべきことを教わって或る種の飛躍を実行します。もしもそれが行われるなら満足します。行われなければ恥じ入りますが、そこにおいて彼は思考しません。彼には恐らく、何か間違った知性を齎すこの行動を疑うことが決してないのですが、それを疑うなら彼が言う真理よりも人間的です。要するに、彼は人間であると言うよりも寧ろ動物であり、理解力を持っていると言うよりも肉体を持っているのです。銜学的な人において不快なことは、精神のオートマティズム (自動化) です。

要するに理解する前に真理を知る時、人はそれを決して良く理解していません。それ故に私は

、実用教育を誉め称えるものには全て心配です。何よりも実行的である教育は、何時までも精神に烙印を留めます。もしも私が最初に計算することを覚えたなら、申し分なく数字のことを決して考えません。偶然にも私が少年とか少女を教える時、全精力を傾けて私が知っていることを、彼らには隠して言わないようにします。というのも、もしも私が知っていることを彼らの記憶の中に大変に強く鮮やかに残したなら、私がそれを知る前に歩き回った道のりを進むことは決してないからです。そうです、行動を習慣にしています。思考を習慣にしておりません。反対に、酷く術学的な人は決まりきって保証された精神と、おぼつかない手探りの肉体を笑われて馬鹿にされます。自由な人間は、保証された肉体と手探りの精神を持っているのです。

(一九一一年三月三日)

五 戦争と情熱 (GUERRE ET LES PASSIONS)

政治の危機が雲や嵐とは関係ないと言われて久しいです。そこから、〈戦争〉も〈平和〉も決して人間の意志によるのではないとも言われたいのです。この思想だけが、大砲よりも恐ろしいのです。それはあらゆる情熱を崇拜することになり変わりなく、何よりも怒りを崇拜することになりありません。

絶望に陥る人間を、元気づける話で人生へ連れ戻そうとする時、忘れずに次のように言うことです、「それはあなたには良いことです。何故ならあなたは絶望していないからです」。同様に、もしもあなたが通りがかりの郵便配達人とか時刻通りの列車ではなくて、恋人に興味を持ちたいなら、あるいは進んでその傷にもたれかかるのを理性によって思いとどまるなら、彼はあなたに言うでしょう、「あなたは恋をしていない人のように考えます。宿命的な恋愛を前にすると私はこの様に考えます」。一口で言えば、精神の病にある人々というものは薬を拒みます、何故なら彼らはまさしく病人であるからです。ところで彼ら自身の中に持っている戦争も、彼ら自身は反対して望んだりしませんでした。それ故に情熱に身を委ねた怒りっぽい政治家は、あなたが平和と戦争について理性的な声を聞きたいとしても、あなたを哀れに見ます。

しかしながら、それはロマン主義の生き残りでしかないように私には見えます。前兆や宿命を人は望みます。この混乱した思想は、情熱による全ての危機の中に自分を見ます。情熱という言葉は良くそのことが言われます。人は力で押ししたり引いたりするのを自分で感じます。同様にあなたは、穏やかな商人の二人の息子が参戦することを考えているのかどうかを商人に尋ねると、商人はあなたに答えます、「参戦はしない、何故なら参戦したくないからだ。しかし参戦する時は、良く参戦したいと思わなくてはならない。風が吹く時は樹木が揺れます。ですから小鳥たちや雲や気圧計を見て下さい」。私が尋ねた人に或る男の声を聞いたように思います、「あなた

はこの理屈だけで女性を殺したくないし、そんなものは良く考えても決して幸福ではない」。そして、その人は答えます、「私は恋愛している時に、あなたにそのことを言います」。この情熱への服従は、大変に古くからあるもので戦争の息子であり、戦争の母です。

もっと若い人の考えは別にあります、彼は産業の息子であり、人間は意志によって大河の流れやペストの感染を変えることができます。一輪手押車が最初に出来て以来、事実として運命は如何に敗走して来たことでしょうか。狡い女予言者シビラは次のように答えたということです、「あなたが望むことは実現するでしょう」。しかし無駄でした。情熱と闘うことが出来る賢者の偉大な思想は、再び軽蔑されます。神を信じなくても、私たちは神の運命や宿命の中にあります。歴史はカリブ人のこの思想を育てます。というのも戦争は私たちが見るところ避けられないからです、何故なら過去において戦争が何回起きても既に避けられなかった、と私たちは考えたいからです。この詭弁には説得力があります。私は本当の学問が人間を怒りや恐怖から守り、犬や馬を調教したように肉体を整えるようになると思います。「私は自我を信じる」。これが〈神〉を追い払った後に〈戦争〉も追い払う善き祈りです。

(一九一一年三月二五日)

六 (飼育)

動物の調教とは、一番重要な人間の行いであり、記録からは何も分かりません。小麦の耕作と車輪の発明と同様に重要です。どんなに過去の歴史を遡っても、何時も偉大な発明が行われています。インドの狼が飼い犬の祖先であると思われることを私は最近本で読んで、これらの未知の時代のことを改めて考えました。

動物を調教するためにどんなことがあったのか、多くの苦勞をすることもなく人は想像します。最初の家畜は恐らく奴隷です。つまり誰よりも弱いか臆病な人間です。あるいは多分、女性です。動物に対してハンターたちは小動物や防備もしない動物を捕まえて、育てて、先ずは食べるために見張っていたと私は思います。食べ物になるまで待っていたことは注目されます。従って自分を守るのが課せられた時、殴打の思い出を忘れずにいました。そこでは脅かしや約束によって、子供や男たちに行うように、彼らに従わせることが可能のようには見えました。少なくとも忍耐や観察が必要でした。それ故に家族や種属が保存している伝統や調教を行う職人たちがいるのです。そのことに最も巧みな者たちが四季や雨を予言したり、教える者としての魔法使いでいられたのです。

その者は実際に狼や牛や馬を調教していますが、何でもかんでもあらゆる種類の動物を何故調教しなかったのか私には分かりません。或る種類の動物の魔法使いがいて、今日の犬や馬を見る

ように熊や鹿を見ていた家族がいたのです。そこから齎されたものは恐らく、未開社会において大変に一般的で古い関係であり、社会学者が〈トーテム〉の像と言っているものです。血族が決定していた家族という集団は、各々が熊とか野牛のような或る種の動物と一緒にであろうとしましたし、雨や風とも一緒にであろうとしました。それは恐らく、各々の集団が自分のやり方で牧畜をやった一番古い時代の記憶です。そして、これらを手探りで行って産業になり、大変な試行錯誤が行われたのです。それは四季についての推測と共に、自然に沿った人間の産業の最初の成功であり、要するに最初の職業になったのです。一般的な〈馬〉とか〈牛〉と呼ぶようになったのは、その後〈職工〉とか〈車大工〉と呼ぶようになったのと同じです。

その後、交配効果を観察したり、新種を作り出すようになる時、或る種の動物は特に好んで育てられ、飼育がより困難であったりあるいは役に立たなかつたりしたものは顧みられなくなりました。誰もが牛や羊や鶏や犬や馬を持つようになりました。家族はその外の職業を名乗るようになりしました。その外の交際がもっと注意して行われました。というのも、犬を訓練するように小麦は決して生長しないからです。しかし長い間幾つもの方法を混合し、小麦を育てたり雨を治めようとしなければなりません。これらのやり方が少なくとも習慣である限りは、それらの実践は全てが儀式であり宗教でした。そして神のことを思考する前に、祈りや呪文があり司祭がいるのでした。

(一九一一年四月五日)

七 (観察と教育)

女性教師は、幼児たちに木の葉の芽を見せるために待っています。或る朝、彼女はやっと一枚の葉を広げているのを発見しましたが、まるで樹齢五〇年の樹木の奇跡に彼女の両眼が向けられたようです。直ぐにお喋り好きな人々は、他の樹木には二日前から茂みがあることを分からせてくれますが、誰もがそれに気付いていました。

先日、他の学校でその女性教師は尋ねました、「春になると木に何が見えますか」。子供たちは声をそろえて答えます、「花が見えます」。本に従うなら、葉が見えると子供たちは答えなければなりません。しかし、生き生きとした眼と、何にでも新鮮な眼には、既に見詰めることしか知りませんでした。そしてその時は既に、無教養であっても子供たちのグループはその女性教師に、観察する方法を教えていたのです。

何であろうと言うことは沢山あります。そして子供たちの眼には先ず、殆どの大人たちには見出せない或る種の渴望があり、全てに注意を向けて行きます。物事を学習して行きます。取分け、もしも何も忘れないで詳細に全てを述べようと努めれば、最も気を付けなければならないこと

を眠らせる危険がそれにはあり、その女性の先生は生徒たちが彼女よりも良く知っている物事を、もっと苦勞して教えようとしている致命的な思いを他の人々にも与える危険があります。それはこの二十世紀に検討された教育方法の目覚めにおいて、単独だった見方を逆にして多くの見方を生んでいます。術学的な人々は自然を発見しましたし、子供たちにも理解させなければならぬこの新しい考え方を生みました。ところがそのような考え方は、部分的には正しいのですが、部分的には間違ってもいます。微妙な差異を見なければなりませんし、子供たちに話をする時には、彼らを何よりも先ず観察しなければなりません。というのも子供たちに話をする大人にとって、子供に話をさせたいと思うことは危険な方法であるからです。子供は思っている程幼稚ではありません。取るに足りない滑稽なことでも大変上手く把握し理解します。一度ならず謙遜もします。私は敢えて言いますが、子供たちを成長させるこれらの無邪気な話を余り当てにしませんし、子供たちが理解しようとして行う眼に見える努力も当てにしません。これらの発育する自然には活発な知性と敏感な感情と優れた判断力があり、もし気を付けなかったなら直ぐに慇懃無礼が生まれます。そして子供は儀礼上無知を装うことはあり得ますし、それは秩序を覆したり学校に退屈したりします。これらと似たことはソルボンヌ大学でも幼稚園でも何処でも観察されます。

しかし特に、観察やその精神について本を余りに多く読んだ人々には偏見があり、農民や労働者は決して理解する術がないと思っています。そこで外観で全て判断する前に、人は彼らを教育したいと思うようになりますが、彼らは先生よりも殆ど何時も良く知っているのです。それらを本当の学問で直ぐに教えなければ、何時間も何年も無駄にしますし、農民とか労働者には理解力があり、理解力に関係したものを持っているのです。例えば柱時計は各々の歯車の歯の数を数えなければなりませんし、次のように尋ねます、「この歯車が一回転する間に隣の歯車は何回転して、その他に振り子は何回刻みますか」。もしも彼らが非常に若かったなら、本物の正しい人間として王道を突進したでしょう。しかし、あなたは彼の耳にあなたの腕時計を近づけて言うのです、「小さな虫を聞きなさい」。子供は虫の声とは思いません。子供はあなたを子供とは少しも考えないので、注意して下さい。

(一九一一年四月十日)

八 (復活祭)

現代でも実際に〈断食〉が行われています。既に高くなった太陽の位置で決まりますが、刺すような風とひらひた飛ぶ雪が試練です。毎年、冬になったことを私たちは確認しますが、直ぐに葉が出て来ます。そして物理学者は、何よりもそれは太陽のお陰であり、暖かい空気が上昇して

冷たい空気を招くからであると力説しますが、それでも何も知らない者のように悲しげでありびっくりさせられます。私たちの希望の上に突然落下したこの寒さは、本当に不当な奴です。私たちは縮こまり、冬のどん底で大変に慎重になります。以上は、太陽があれば逸早く花が咲きますが、喜びの花々も凍って仕舞うということです。

それは人生の辛さを考え、慎重さが大切で、最初の喜びに現を抜かさない必要があることを理解するに相応しい季節です。断食の時は悔悛し、太陽や風や水蒸気による如何なる神の意志もありません。もしも私が冬の季節は人もモルモットのように眠りながら少し動くと思像とするなら、全盛期の後、行動や計画の開花の後や不注意にも目覚めた後に私が理解するのは、当時のノルマンディー地方は突然に冬ごもりとゆっくりとした生活を始めなければならないことです。記憶と伝統の中で決定するのが経験です。そこから復活祭の開放感を前にして、太陽のせいではあるが再び欲望を断ち、再び断食し、そして風邪や気管支炎にならないために用心して、結局は陰鬱になるのが賢明であったという考えになります。従って、善良な女性は後悔し、その時以来祈るために体を屈めて、自然に従うことしかしません。

同様に、復活祭直前の日曜日の枝の主日に、柘植とか樅の枝を持っているのを私が見る時、それでも彼女たちは希望を信じて、本当の冬は繰り返さないことを彼女たち自身が証明するために、その徴として最初に出た葉を持って来るのを私は理解しています。それは大変に自然な動きであり、そのために次の復活の証しのようにその枝を折ったり、別のものを示しに行ったりして、最初に出た葉にもっと良く守られたのを或る小さな谷で発見します。それ故に他人の財産を奪わないために、何と木々の枝が何時も緑色をしているものしか使わない儀式となっているのであり、それで十分に説明されます。

宗教は儀式の後に齎され、儀式そのものは経験の後に共同で調整される自然な反作用でしかないことが、そこからはっきりと分かります。そのことについて詩人や哲学者は祈りを解明するために、神を創り出しながら研究したと言えます。しかし、私にはそれは何時も始めに神が先行した信仰であり、それが神の本当の証しであったように思えます。断食の時に人は身を屈め、自分の中に閉じこもります。風のせいでも崇拜したり恐れたりすることを顔に出します。復活祭を愛し崇拜するのは太陽のせいであり、蘇生させ復活させる力のせいです。それが愛するための時間である時、先ず人は愛します。ロメオはジュリエットの優雅さで飾られます。この様にして人間の悲しみから神の怒りが生まれました。神の優しさは人々の希望から生まれました。そしてついには自由になった人々の喜びから救いの神が復活されます。司祭は王の様になります。王が物事を決めるのは、司祭は王がいなくても動くからです。

(一九一一年四月十一日)

急進主義は何よりも批判的で否定好きです。オーギュスト・コントは偉大な革命の思想である自由、平等、博愛は何よりも先ず否定することであることを良く理解していましたし、それは隷属、特権、戦争の否定を望んでいます。同様に、自由な思想は迷信を否定します。要するに急進主義は、権力者に対しての反逆です。それは奥深い思索家たちに、急進主義は歴史の一瞬でしかあり得ないと言わせることであり、それは否定と肯定を和解させに来る何らかの意見でなければならず、結局それが〈社会〉における〈自由〉を準備しています。さもないと私たちは無政府主義の不安定さを持ちますし、全ての市民が権力と闘い、権力者自身も権力と闘い、政府はそれ自身が矛盾へ向かいます。

私は今では権力と規律との関係を求める多くに人々を知っていますが、彼らは軍団になって他の人々と一緒に考えて行動し、ついには考える前に生きることを望んでいます。というのもそれが自然な秩序であるからだ、と彼らは言います。強く組織されて結びついた肉体にしか思考はありません。この類推から、政治的主張も組織された政党の中から共通の規律に基づいてしか生まれないと彼らは判断します。そして、それらの主張は批判に対してもまるで執着していないかのようです。というのも全てに反対論を述べる事が出来るからで、その様にして個人はブレーキもなく関係もなく、要するに宗教もなく、批判することの喜びに身を委ねるや否や、彼自身に対する闘いや彼自身が分割されているのを感じます。そこから団結や組織や信頼の必要性が生まれ、それは社会主義者の統一を説明しております、とは言えそれは同様の意味において闘う組織です。同じことは比例代表制にも言うべきであり、それは或る意味では戦術の問題ですが、実際は恐らく党派や確実な組織が要求されます。

思想の自由や言論の自由の上に確立されている〈公教育〉の条件を何人かの友人たちと共に検討したように、このことを私は考えました。パリでは、少なくとも〈公教育〉は批判によって権威を失っているのは確かです。それは世論を尊重して運用する市民のことを、今後も忘れることはありません。或る人が私に言いました、「シヨン運動家たちは大変熱心に議論しますが、決して大声を上げたり怒ったりせず、この上なく純粋な同胞愛そのものです。しかし彼らは、或る会合の後で得るものは何もなく、恐らく彼ら自身が何か崩壊の前兆である機構の亀裂を感じながら、私たちから離れて行きます。もう彼らと再会することはありません」。私は、同じことが社会主義者にも言えると昔から気付いていました。彼らは何時にも、議論は動揺するのではなく構築することを望んでいましたが、議論することは動揺を与えようとする事になります。事実、彼らの教育は教条的ですし、教育は全てが教条的になりたがりです。証明に極めて厳格な数学者でさえも結局は弟子に言います、「もしも知る前に議論を望むのであるなら、あなたが知ることは決して何もない」。そして、同じ問題は小学校にもあります。服従して読むことを覚えるように、演習や規則に従うことで計算を覚えなければならず、僅かな数字の計算から生じた結果を理解するところまで木製の積み木で組み合わせることもありません。その様にして納得することがない急進主義は至る所に敵を発見しますし、彼自身の裡にも発見します。単に歴史の一瞬ばかりで

なく、各個人においても絶えず発見します。というのも人は何時も思考することが出来ないからです。毎日良く眠らなければならず、各々の瞬間であっても同じで、結局は注意力に努力することです。自然は何時も一番強いのですが、キリスト教の公教要理の教えは何時も十分に打ち勝っていたのです。最も危険な幻想の一つは、幾つもの真理は人が懐疑を止める時に真理を留める、と信じることにあります。

(一九一一年四月十四日)

十 進歩 (LE PROGRÈS)

その時代の社会主義者たちを見分けることは、彼らは歴史家であるということです。「或る社会の次には別の社会があり、或る機械の次には別の機械があり、或る正義の次には別の正義がある」。従って彼らは、何時も一つの正義を信じている急進主義者を嘲笑します、でも自分がいる場所には種を蒔いて水を撒かねばならないのです。ところがこの高度な歴史家たちは、自分たちの知識で容易に私を圧倒します。しかし、彼らは社会の中にある本来の力によって、一步の次には別の一步を生む進歩を当てにすることは決してないと私には思われます。刻一刻に生まれて解体して行くのが進歩であると私は理解しますし、それは思考する個人によって行われます。進歩は、泣き言を言う市民によって解体します。未開人が影のように私たちの後をついて来ます。

先ずは、私たち一人ひとりの中のことです。何ものかを知っていると信じることは間違いです。人が学ぶことは、勿論です。そして学ばば学ぶ程、はつきりと理解します。しかし、休んで眠るや否や神学者になるのです。そして、眠りと一緒に夢が戻って来るのと同様に、精神の眠りと一緒に不正や戦争や暴君も戻って来ます。明日のことではなくて、直ぐにそうなります。それは私たちの裡や周りで、一晩で陥るようなものです。それ自身を模倣するか、別のものを模倣しますが、それは全て同じで一つです。人は眠るのと同じように、容易に野生に何度も陥ります。

思考や観念を愛した才気に満ちた若者が、そのことのために未開人になっていると信じるのは間違いです。もしも彼が少なくとも副知事であったなら、彼には上司やおべっか使いの部下を持つことになります。もしも自分自身と闘わなかったなら、これからは暴君と奴隷を持つことになります。最良なら大臣になりますが、上手く行っても最悪と理解して下さい。

凡才の画家たちに就いて最高傑作が生まれた、というのは真実ではありません。偉大な画家は自分の才能で進歩を遂げます。彼に就けばデッサンも上手になるというのも真実ではありません。コロー(1)やドービニー(2)に就けば絵が上手に描けるといっても真実ではありません。ベートーヴェンに就いて、彼よりも良い音楽が創れるというのも真実ではありません。

私は、他人に就いても一步を歩む知恵しか理解しません。あるいはもっと正確に言うなら、他

人に就いて機械を作るのが産業です。しかし、本当の知恵は芸術のようなものです。個人は自分だけの能力で自分の裡に創るのであり、助けなければなりません。そして彼は、それを遺産として他人に残すことが出来ません。私は他に何が言えるでしょうか。彼は遺産として自分自身で楽しめません。思考とは春の新緑のようなものです。樹木の幹は、新緑の支柱でしかありません。

私たちは正義を生むことは出来ますが、森の神のようにそれを守ることは出来ません。詩を書き始めようとする前に、正義は死んだのです。その年の新緑だけを期待しなければなりません。ドレフュス事件は、それに関われば関わる程、腕を伸ばして事実を捕まえれば捕まえる程、上手く行きました。裁判になるや否や、事件は眠っていましたし、死体になっていました。裁判長は直ぐに暴君になります。その裁判は直ぐに眠ります。その大臣は直ぐに反動的になります。大臣に同意することによって、私たちは直ぐに後ずさりします。その土地を権力は再び手に入れます。社会が思考することもなく変われば、考えられる悪は全て製造されます。それらの機械は何の役にも立ちません。破城鎚や石弓のように、飛行機で不正を働きます。もしも社会主義者が都市を造ったなら、その都市は直ぐに不公平なものになるでしょう。決められた音や拍子で泣き言を言うのを拒む個人、そして急進的という塩がなければ、全ては腐ります。眠れる社会に反対して、思考する個人には永遠の歴史があります。そして春は何時も冬に勝つのです。

(一九一一年四月二四日)

(1) ジャン＝バプティスト・カミーユ・コロー (一七九六～一八七五) は、バルビゾン派を代表する風景画家の一人である。

(2) シャルル・フランソワ・ドービニー (一八一七～一八七八) は、印象派を予告する画風で描いたバルビゾン派の風景画家である。

(次章へ続く)

十一 (歴史の原因)

我らの父なる太陽への信仰から私がお参りするこの小さな地方において、家々は小さな丘の斜面にあり、洞穴に続いています。従って石器時代の労働は今でも有効です。しかし、岩には小さな孔があり脆くなっています。樹木の根は張り、水を吸収しています。要するに先日、洗濯場の天井が落ち、そこにあった大鍋を押し潰しました。その直前まで、その建物の所有者は独特な曲線や苔の色調で、訪問者を感動させていました。岩の塊は最早、木の根の先でしか支えられていませんでした。しかし、決してそのことが押し潰される運命ではありませんでした。

精神は、些細な原因に出会っても迷います。散歩者は一瞬立ち止まり、左へ向かず右に向き、日陰を探し、砂埃をやり過ごします。それと同時に、活発な木の根が何と岩の隙間に入ります。僅かな水が染み出ます。それは微量の砂から二つか三つの雪崩を発生させます。既に葉が一杯に繁っているリラは、自分の根が岩の奥深くまで入ったのは風で倒れないためであると感じさせています。この様にして、散歩者と災難は一方から他方へ歩いて行きます。私たちは事件が起きた後でしか考えません。そこから神学が避けられなくなります。何故なら小さな原因から大事件が起きた結果を思い出すからで、私たちはそれらの結果についての原因を助言しますが、それは道理が逆になったようなもので、歴史家が良くやることです。それというのも、現実には私たちは一つの原因が他の原因になるのを良く知っているからです。その様にして砂の粒は根の圧力で離れて行きます。水の浸透で他のものになります。重さは何時と同じ方向に引っ張り、均衡を求めていました。散歩者はこの砂埃で立ち止まります、その結果、風と太陽も協力しました。しかし、まさしく私たちの浜辺に打ち砕かれにきた原因という大洋の中で迷う私たちは、もしも大鍋よりも貴重なものを砕いた土で粉々になったとしたなら、もっと悲しい事件を思い出すこととなります。そこから原因の上には偽りの光があり、運命という濁った思想があります。〈神〉は遠くにいません。私は説教師が言うことを聞きます、「兄弟よ、神の指は全てを見ています。犠牲者になる時間は指定されていたのです。水滴と根と砂粒と風と太陽は永遠の掟でした。そして、不幸な散歩者も同じでした。というのも彼は行き、止まり、幻想的に自分を見て信じていたからです。そして運命に向かって行かねばなりませんでした」。誰もがこの神話、この最後の死の解釈から逃れることは全くありません。

ヴォルテールは神父ラヴァイヤック (1) が十五歳で溺死していたなら、何が起きるのか自問します。恐らく、ヨーロッパは別のものになっていたことでしょう。しかし、それは空想でしかありません。もしもあらゆる原因を似た様にもっと良く考えたなら、神父ラヴァイヤックは、アンリ四世が救ったのと別のヨーロッパに少し変えた原因を、一つに纏めれば十五歳で溺死することは出来たと人は理解します。多分、アンリ四世の誕生を妨げることでしょう。神父ラヴァイヤックが溺死させられたと仮定する時は、それはあなたが仮定するのとは別の〈世界〉であり、そこ

にはあなたが気に入って追いかけるものとは別の変化があるのです。しかし、私たちの学問は余りに根柢の無いもので、驚異的で非凡な地理学の本を読むのは余りに困難であるように、私たちは運命の線を引き、そして歴史家として考え、先行するものに導かれながらついて行くことや、歴史はその時〈神〉によって歩いているように見え、まさしく私たちは起きたのを知った事件の方へ歩いているのです。過去は何時も私たちを騙しています。でも、ヴォルテールはボシュエ(2)と違ったやり方では字の綴りを言いません。

(一九一一年四月二五日)

(1) フランソワ・ラヴァイヤック(一五七八～一六一〇)は、アンリ四世の暗殺者で、四つ裂きの刑に処された。

(2) ジャック・ベニーニュ・ボシュエ(一六二七～一七〇四)は、仏文学史上最大の雄弁家の一人とされている聖職者・説教家である。

十二 (創造者)

悪口は何時も同じですし、犯罪も何時も同じです。女性への男性の悪口は、古代ローマの喜劇作者プラウトゥスとか古代ギリシアの喜劇詩人メナンドロスとか古代アテネの政治家で雄弁家のデモステネスを翻訳しているようなものです(というのも、この雄弁家はしたたかに侮辱するからです)。けれども、それは最早機械と同じではなく、箴言集も同じになりません。要するに、私たちには産業や法律のために沢山の創造者がいるのです。しかし、その人の裡では幸福に生きる術とか、その小さな世界を各人が管理する術に関して、私たちは決して創造者になれません。各人は、人がやることをやり、言うことを言います。私たちはパンを与え、石炭を与え、シーツを与える思いやりを広めますが、その本当の名前は正義です。しかし、本当の思いやりとは生と死を和解させる方法を各人に与えることであり、その情熱に従って自分や人を慰める方法を与えることですが、私たちはそのことを余りに忘れていました。

カトリック教徒やこの種の信者たちは誰でも〈神〉の言葉を持って来ます。しかし既に創造することはなく、まるで連禱のようです。彼らは枯れた植物です。葉を与えて次に花を与える新芽が私は欲しいのです。イエス・キリストの〈模倣〉は、その目的のための一冊の本ですが、理解することは非常に難しく、それには先ず信仰が前提になるのですが、私が言う信仰は型どおりに行われるものです。ところがそれはどんな時代でも珍しいのです。個人個人は、信じられないものを極めて沢山持っています。彼らが宗教とか哲学のようなものに少しでも助けられると、彼らの役に立つものとして手に入れることとなります。しかし彼らは、園芸家でもある修道士を手本として元気を貰うことが望まれているのです。従って、彼らの深い信仰心は情熱の中で方向を変

えます。愛の中で方向を変えるようになるのは怒りです。

罪の懺悔は良くでっち上げられました。私が子供の時に小罪を数え上げていた時代、司祭の家ででっち上げに私は気付きませんでした。私は役所の窓口にいたのです。法や規則を私は引用されました。道徳は、役所に似てくると破綻します。モラリストはその都度、工夫しなければならず、一人ひとりがモラリストになります。恐らく、女性が修道士よりも少しはより良いものを自然に工夫して創るのは、赤ん坊を生んだり、赤ん坊の感情になったりするからです。しかし、知識という間違った観念によって、ありふれた考えの決まり文句には既に、余りに多くの力が全ての人にあります。知識は正しい格言ばかりではなく、馬鹿者が聖遺骨を身に付けているようなものです、見た目には全てを忘れ、全てを身に付け、精神の力で全てを変えたものであり、突然に正しい言葉が生まれます。キリストは言葉を生み、その様にして奇跡を行いました。彼のように工夫して物を把握し、個人個人を理解し、良い時に道徳の種子を蒔かねばなりません。

ナポレオンは何よりも先ずこの種の創造者であり、個人個人に話す術を心得ていたと、私は本当に信じています。雄弁とは何でしょうか。それは、その時に創意工夫することです。それ故に、若者向けの道徳本を読むと私は悲しくなります。何時も同じことの繰り返しで、具合が悪い枯れた枝です。私は挿し木がしたいのです。結局は創造です。独自の何かです。というのも、まさしく他人のために一番生き生きとして、仲間の内で一番快活で、一番個性的な創造を行っている人が注目されるからです。一般的な考えは誰の意見とも一致しません。従って、全ての人が泣き言を言って自分を作り直すのが教会であると私が理解した時、そのようなものにソルボンヌとか、社会主義とか、道徳同盟とか、真理同盟と呼ばれるものがありますが、それらは〈精神〉を大地に埋葬する副助祭のように私には見えます。

(一九一一年五月一日)

十三 建て前と本音 (LA HORME ET LE FOND)

文化についての論争では少なくとも小競合いがあり、ソルボンヌの連中は有利な立場にあると思っています。何よりも彼らにはドレフュス事件後に生まれた王党派の民族主義運動であるアクション・フランセーズや伝統主義者たちがいるからです。従って、彼らはありの儘の裸の真実のために闘っていると思っていますし、そうでない人々は服を着ているようなものなのです。要するに、論争は建て前と本音の問題であり、ソルボンヌの連中は理性的な人間と見做されていながら本音を言っているものであり、上辺だけの作家連中と一緒にいるのです。

しかし、この種の闘いにおいては言葉しかないのですが、反省もなく二つの側面からスローガンを付ける必要はありません。というのもスローガンはここでは武器であるからです。ところ

で真っ先に私が言うのは、ソルボンヌの文学（というのも学問は論争を外れているから）は、決して本音を口に出さないし、同様に建て前も口に出しません。ソルボンヌはその二つを軽蔑しています。建て前でも軽蔑しています。というのもソルボンヌは良く知られた主題とか処世訓とかありふれた道徳心についての変化とか拡大のように、修辞学の訓練を拒絶しているからです。しかし、ソルボンヌは作家の真実とか間違いを探求したくないので本音も軽蔑しますが、単にそれは同じ系統の観念であり、徐々にそのように作家たちを考えざるを得なかった機会を生んだのです。或る意味では良いことですが、それは探求精神という特異な決まりのようなものを身に付け、気力のない或る種の懐疑論へ導きます。構成したり、あるいは寧ろ好きでもなく力強くもない多くの意見によって観念を大きくして再構成して気力をなくしているのです。恰もヴォルテールが平凡で読むに堪えない五つか六つの作品中に、生き生きとして輝かしい何かの観念を見つけたようなものです。ところで道徳や宗教や政治にとっては重要な思想が問題です。そして、それは作家が如何にそのことを思考するように導かれたのかを説明することしか理解されません。あるいは正義の名の下に、私たちが時折様々な意見を次々に聞かなければなりませんし、色々な時の事実は会話に出ており、その時は或る巧みな演説家がそれらを掻き集めたのである、とはつきり言おう。人々はこの意見を持つことが出来ます。絶対的な歴史家になることが出来ます。つまり当時のパリの人々と同じ資格で、一つの事実を、四十八ある社会主義の複数の事実としての意見を検討することです。しかし、公教育は一つの教義としてのそのような意見を提示出来ないと言います。私はソルボンヌに多様性と自由を望みます。いずれにせよ、奇妙な意見でも心を高めることなく私は決して言わせませんし、通りがかりの狂人たちのために思考して苦悩するこの歴史家たちは、演説家や詭弁家に対しての思想や本音のために頑張っているのです。

そして結局のところ、建て前と本音は決して別々に出来ない気付いたなら、演説家や詭弁家になることもなく建て前に頑張れますし、平凡な形式は観念が実際に思考でもなく深い関係にもないことを示しています。というのも私が本当の形式を理解している詩は、二種類の重要な証拠を現せて見せているからです。この賭けに全財産を使う一人の人間の全てと、例えば証拠は肉体であるのを思い起こさせた事物です。

(一九一一年五月二三日)

十四 愛と欲望 (L'AMOURET LE DÉSIR)

別れて耐えることよりも寧ろ一緒に死ぬことを決断した恋人たちのことを、屢々新聞で読みます。一つしかない命を冷静に犠牲にすることが出来て、更にそんな人生を人が愛したなら、人は何を犠牲にするのでしょうか。そこにあるのは奇妙な狂気です。教育も人々の愛情も世論の暴

力も、そこでは多くのことが出来ません。

恋愛感情において非常に活発な肉体的欲望の影響を理解したいと思っても、すっかり騙されると思います。もしもあなたがそれを望んでも、危険でもなく病気でもなく、全く別の結果が生じます。その時は他人の奴隷になることよりも、必要性そのものの奴隷になる方が良い結果が見付かります。それは欲望を通してのやり方であり、殆ど選択の余地はなく、動物以外の何者でもなくなります、要するに何処の地方でも売春行為の商売が繁盛する所以です。この種の興奮は発作的に出るのであり、仕事も人生設計も家長の愛情も変わらないように見えます。それ故にこれらの店は誰にも控え目で、快樂の道具のように女性たちは雇われ、その行為は黙認されます。確かに恋愛感情を抱くには及ばず、全く反対で、この奇妙な行為は恐らく女性を投げ込む愚鈍さや無感覚や墮落によって恋愛の魅力を減少させる原因になり始めます。

そして、この遊びと反対のものが、恋愛から力を生むものを良く把握するようになるのです。愛されたいと思うことは支配したいことです。力とお金と喜びが与えられなければ支配されません。というのも、それらは小さな名誉であるからです。本当の名誉は自分で納得するものです。しかし、それでは少し言い過ぎです。人は精神的に、そして精神として愛されたいのです。遠慮がなく、精神的な羞恥心がなく、なびきやすい女性は好かれることに熱心ですが、決して心から愛されません。精神的に自分を隠す女性は自分を守り、控え目で、内面的生活があり、その中には夢があり、その中を望み、遙か遠くにいて、見えなくても見詰めて、自動的に行き、見抜かれることがなく、自分の場所に止まり、足るを知ります。それがその種の女性であり、真心からそうであり、その様な女性は野心のある人には恐ろしいのです。

取分け、何かの混乱、早く鎮圧された徴、その中での闘いにその野心家が驚いた瞬間から、それが多分原因になります。多分そうです。愛が生きるのは多分、一人の上です。私は恋愛感情のことを言っているのです。その確信が完全な幸福に変えますが、波瀾がないかあるいはそれを殺すかです。恋愛は野心です。それは力のある敵や、美しい勝利に値する敵を探します。あるいは勝利を探さなければ、手に入れた喜びに関心がありますが、もしもそれを疑えば新しい愛の証しを望みます。彼は勝負に生き生きします。彼は視線や動きを窺います。この様にして別居の日々、抵抗、障害になるものが狂気にまで愛を掻き立てるのです。しかし、肉体的魅力は信じる限り大したことはありません。そして遊蕩は、そこでは寧ろ正反対のものです。

(一九一一年五月二八日)

十五 党派 (LES PARTIS)

そうです、もしもフランスに三つか四つの党派があつて各々が権力を奪いたいと判断したなら

、各々の党派は支持者と同じだけの力を持っているのは正しいこととなります。しかし、党派とは抽象されたものです。存在して行動するのは個人個人でしかありません。そのことに基づいて〈比例代表制〉は党派の長たちの中に正義が確立されます。そして個人を管理する学識が重要になると、良いことは何もありません。

しかしそうは言っても、もしも有権者である私たちが少なくとも長を選ぶために投票するのであるなら、誠意を調べなければなりません。野心のためには権力を奪うことが重要であることを私は良く理解しています。政治家たちは自分の情熱によって非常に盲目になるので、最後には野心による賭けの正しいルールに正義の名を付けるのです。政治家は両眼で政治と法律しか見ませんし、その法律は管理し支配するものです。従って比例代表制は、大部分の代議士が選挙のルールと見做していることも私は良く理解しています。でも彼らには支持者がいないことに私はびっくりします。というのも誰が大臣になるのかを知らなければならぬとするなら、私が現実にしつかりと自信のある声で大臣を言うでしょうが、選挙人が全てを変えられる日まで、もしも彼らがそれを望むのなら、要するに権力を握って守る党派はどれであるか知らなければならぬとするなら、支持者の数を可能な限り全て正確に数えなければなりません。比例代表制は政治的人間の中では公正さを確立します。

しかし、有権者はこの公正さにまるで関心がありません。街娼にお金を支払う遊びのようなものとしか思っていない。というのも如何なる暴君も価値は何もないからです。暴君の中で最も合法的な者は、まさしく最も危険です、何故なら最も強固でもあるからです。従って野心家の中で確立されるこの公正さは、君主と人々の関係において実際には不公平を生みます。何故でしょうか。何故なら、最も強い党派の長であると私が理解している君主が四年間選ばれたとするなら、人民の意志は最早自分の権力を感じなくなります。それ故に、党派の精神、悪弊、特別待遇、無駄遣い、裁判拒否、それらに世論は絶え間ない一つの行動によって絶えず反対しますが、獲得するであろう票を示したり数えたりして支配する党派を忘れることが出来ず、全てに応酬を見付けて、友人たちに良い地位を与え、巧妙に敵と交渉して、結局のところ勝利の後に果実を取り入れる四年間を手に入れます。要するに、ここに私は国民投票の理論を認めるのであり、結局次の様に言うこととなります。人民は管理することが出来ません。絶えず干渉することは政治家を麻痺させ、大望を挫き、行動を狭くさせます。それ故に人民は長を選ぶのです。以上は共和制の真の方法です。そして、そこに政治家たちの隠された思想があります。何ものかに反対して有権者は抵抗し、更に勇気ある何人かの味方を議会に見出します。それは幸いなことです。

(一九一一年六月二日)

良くあるテーブルです。真っ白なテーブルクロス、銀の食器、カステラ風お菓子のプチ・フル、招待客が一人。女主人が上手に導く会話は、義兄の文学作品に及びますが本人はおりません。軽率にも、その招待客は自分の昔からの仲間で何とかさんという友人のことを仄めかし、雑誌に影響力をもっている人とのことでした。サラダの時間に、そのことがついに話題になりました。

「私の義兄は、フランスでは未発表のロシアの新作を三つ翻訳しました。もしお客様のあなたが、何とかさんというその方に雑誌に少し書いて貰ったなら、きっと話題にならないことはないと思うのですが」と主人は言いました。

年老いた伯母は言いました、「一頁に十五フラン払うらしいわよ」。お客は言いました、「よろしい、原稿を持ち帰り、読んでみてどうなるか見てみましょう」。

皆はお互いに見つめ合いましたが、まるで物事は一人だけで上手く行かないことを思っているかのようです。実権を握っている夫人が平然とした様子で答えます、「原稿がここに無いことを、あなたも良くお考えですね。義兄がその方へ、しかるべき時に原稿を送ることにしましょう。そして、あなたは原稿が印刷された時に、もっと良く読むのです。意見が重要ではなくて、友情に溢れた推薦が重要なのです」。

お客は言いました、「良く分かっています。しかし、友情に溢れた推薦状がその様な場合、どの位重要でないかも私は良く知っています。もっとあなたのお役に立つように、私はもう少し良い様にしたいのです」。

夫人は言いました、「あなたなら出来ますわ。外国のものが重要ではありません。あなたは義兄と顔見知りになります。そして、彼が何でも平凡なことを書く人でないのをあなたは良く知ります」。

お客は言いました、「あなたの義兄さんとは、実際に二回お会いしました。そして彼は大変丁寧に、私の健康の様子について二回尋ねました。私はそれ以上のことを敢えて考えようとは思いません」。

「彼のロシア語は完全だと言われています」と年老いた伯母は言いました。

夫人も言いました、「しかし今、私たちは義兄の評価を議論していません。ここではそれ以上誰も疑っていないと考えます。ロシア語のことは外国人や競争相手によって議論されるだけで十分です。私たち家族は結び付きが強く、神に感謝しますが、一人ひとりが家族を当てに出来るのです。あなたには家族がどなたかいらっしゃいますか」。彼女は、お客に上品な流し目を向けながら言いました。

「軍馬のあなたは、一言も書いたことがなかったのですか」と老いた伯母は言いました。

夫人も言いました、「そうです、あれもこれもやらないのですね。このご立派な歳を召された軍馬の方は、少しも躊躇したりしませんでした。〈親愛なる夫人よ、あなたが確かだと思っ瞬間から素晴らしいと私は信じます〉ですわ。そこに友人がいます」。

しかしながら、子供や甥や従兄弟たちが怒った様子をしました。そのお客は原稿を書きました

。その記事は公表されました。しかし、大した評判にはならず、更にその何とかさんは無視しました、何故ならロシアオペラが流行していたからです。実生活では、私が想像した会話もその中で起きています。そのお客は期待どおりに全て書きました。不公平であっても、それも礼儀作法なのです。

(一九一一年六月七日)

十七 支持層 (CLIENTÈLES)

急進主義者たちの間では誰も人気や支持層のことを論じないのが、私には残念です。というのも現代の〈比例代表制〉という博士たちは、それは制度として病気であり、治療が望まれていると言っています。私はこの告発が取り上げられるのを望みますし、有権者の敵を討って欲しいと思います。

そうです、郵便局員とか鉄道員の名をかたるには何百もの命令があり、それらには特別待遇は少しもありません。あるとするなら代議士が投票用紙を知らないようなものであり、更には敵に勝つのが肝心なのであって、候補者の能力よりも寧ろ政治的世論を何故重視するのか私には分かりません。世論によって監視されている代議士は、酔っ払い、怠け者、喧嘩好き、放蕩者に進んで忠告しません。あるいは如何なる場合でも彼は色々なニュアンスを持たせて忠告します。要するに、大臣はそれなりに事情に明るくなります。但し、私たちの小さな職務のことも考えて下さい。それらの仕事は誠実さが試されているのであり、敢えて言うなら自分の投票を売って意見を言わない人々の中から採用されているのです。

しかし、それでも醜聞はありません。でも破廉恥な特別待遇はあります。そうです、大臣や代議士や高級官僚の甥や従兄弟のための特別待遇です。勿論、それは優遇される有権者とは違いますし、息子や婿や甥や従兄弟なのです。比例代表制はそこで何を生むのでしょうか。党派の長が六万フランの国庫を持参金代わりに婿に与えさせる代わりに、少なくとも良い地位に就けるということをお前は信じますか。この新制度ではそれはないと私は信じていますが、党派から党派への取引があり、大金が支払われての離党もあると思っています。これらの取引を全て愛さない有権者は、意見を聞く機会の多い閑職にある者も愛しませんので、自分の声を理解させるのがより困難になります。そして人も言うように、原則の問題は人の問題に対して優位を占めます。息子や婿や甥や従兄弟は、それを大変に具合が良いと感じています。

それでも偉大な有権者たちは存続していますし、彼らが委員会の長であり、世論の運転手です。しかし、良識はこれらの人物たちの影響が少なくなればなる程、代議士が個人的に益々知られるようになることを分らせてくれます。従って、如何なる名簿式投票でも構わずに苦勞するこ

となく代議士の名が理解されますし、取分け比例代表制、選挙準備者、交渉者たちと共に委員会の指導者たちは、以前より権力を持ちません。そしてもしも今、彼らの仕事にお金を支払わなければならないとしたら、県委員会が名簿の筆頭者を選んで彼らの党派の候補者を公認する時、明日はどうなるのでしょうか。その時は代議士たちが、有権者である大衆よりも委員会とか新聞に大変親密に依存するのは明白であり、そこから特別待遇は増大し、今回は何よりも選挙運動員に運命づけられます。そして一人の代議士ではなく、五、六人の代議士が親密に連帯します。この様にして思い上がった比例代表制論者の主張を揺さぶって下さい、検討して下さい。何も残らないでしょう。

(一九一一年六月十一日)

十八 精神文化 (CULTURE D'ESPRIT)

もしも私が精神文化について喋らなければならなかったとしたら、先ずは微妙な差異を無視し、十分に目に見える特色を強調します、それは知識という文化を大変良く見分けます。多くの真実を人は知ること出来ますし、大変上手に活用しますが、それを良く証明することがありません。従って、化学者が二つの物体が如何なる状態であっても結合するのを予め言うことが出来たなら、有能な学者であると言えます。しかし彼はその中で才能を伸ばすことは決してありません。彼は自分自身を発見するとか、少なくとも思い出した全てのもので彼が知っている真実の範囲で伸ばすことになります。そして、それは平凡なものであっても、これらの真実が最初は未知のものであるか、つまり本当に疑っているかどうか、本当に探しているかどうかでしか自然に本心から自分を一人前にすることは殆ど出来ません。というのも確かなものとして既に分かっていることの証拠を探す時、その探求は弱々しく余りに容易であるからです。人は決してそんなことに自分を打ち込みません。子供たちの精神を駄目にします。最初から地球が回っていることを子供たちに言って始めます。そしてその後で証明することは、子供たちには余りに容易です。同様に将来、躊躇いから疑っている振りをしたり、恰も知らないが如く子供たち自身が証明されている振りをした時、無知の者の純真さを身に付けることも決してありません。一つのことを知る時、最早それを学ぶことが出来ません。それ故に、もしも私が弟子を育てたいなら、多くのことを教えないように十分に注意しますし、同様に、例えば如何にして星々が回っているのかをはっきりと理解させるように注意しますし、全くそれが真実でないとしても、それが真実への道なのです。というのも勉強の最初は、間違っただけの弟子を導き、その儘にして置き、間違いを避けることよりも判断力を養うことが重要で、一口で言うなら義務として間違えるのです。

もしもあなたが、デカルトが知らずに他の人が知っている真理の数を考慮に入れたなら、デカ

ルトは学者であるよりも月並みな物理学者の一人でしかありませんでした。しかし、もしも精神のあり方や証明の研究を考察したなら、デカルトは現代の物理学者よりも教養があったと言わなければなりません。その意味で、デカルトの間違ひは術学者の真実よりも遙かに良質です。それ故に、私は子供を出来るだけデカルトのようにしました、それは知るといふ好奇心を持ったもの全てを自分自身で見付けなければならないのです。今日では多くのことを知る必要がある、ここでは主張する必要は決してありません。何時も時間は早く行くのであり、例え始めに精神の働きの遅れをとったとしても難しいことではありません。

考えることは本来、或る物をあらゆる方法で吟味して真実か間違ひかを自問することにあるのではなく、証明することの価値を正確に判断すること、本当らしいことでしかないものを本当のことと正確に判断すること、利用するのに便利であるようにあらゆる意味合いを混合させないで確かなものを確実に判断することにあります。そしてそれが多分、明白な解答が見付からないとはいえ、美学や倫理の問題がより良く研究されることになるのです。というのも、人はそこから疑うこと、模索すること、そして最後には考えることを覚えるからです。そして、もしも人がそれらをより良く教育したなら、学問は同じ目的へ行くことになります。

(一九一一年六月十三日)

十九 有権者と党派 (L'ÉLECTEUR ET LES PARTIS)

人民投票は人民に問うことにあります。「あなたが望むのは如何なる長ですか。ここでは治安、戦争、消費、生産に関しての原則が示されます。考えて選択して下さい。その後で、あなたは選んだ長たちに、長い期間の信用を与えています。彼らは良き水先案内人として、双方の権利要求で何時も停滞する代わりに、遠くから見詰めて法律を制定し管理します」。従って、君主政治や寡頭政治の力は全て生きています。というのも市民は全員が同時に不幸にならないからです。もしも権力の濫用が直ちに治らなかつたなら、それらは直ぐに忘れられます。特に、革命を前にすると市民は躊躇しますが、その様な制度の中では市民は優れた独特な資力になります。この力は強く、直ぐに熱くなった頭を冷やし、喋りすぎる人々に猿ぐつわを嵌めさせて来たことをつけ加えましょう。忘却は、考えが目覚める前にこの様にやって来ます。従って、暴政は少しの巧妙さと幸せで、長く継続させることが出来ます。

国民投票はそれとは全く反対の制度です。というのもそれらの権力は、法律を適用してやるしかないからです。彼らは役人だけです。国民が相談されることはなく権利と義務においては何も変えられません。例えば、マルヌ県とオーブ県の地理上の境界紛争の解決は普通選挙に求められます。労働者も農民も同じ投票用紙です。モロッコの政策実行も同じです。そして何故この制度

が実現不可能なのかも知れません。各市民は読んで計算して議論する時間がなければなりません。あるいは彼が経験に従って判断しなければならない時、私はそのためには彼の経験を言います。しかし、不正行為についての法律の影響は、長い時間の後でしか市民全体には感じられません。そして、それらの不正行為は殆ど何時もごっそりと既成事実によって消されて仕舞います。モロッコ問題のことは、なお一層そのことがはっきりとしています。

管理された人々による統治の統制は、国民が最も執着していることであり、国民投票という方法によって確かに求めていることではありますが、同じ国民投票によっては行使される筈もないことをつけ加えましょう。人民投票と国民投票との間には、何か中間の制度を選択しなければなりません。そして、議会制度に戻って、その中で国民の代表者たちが権力行為に制度なしで統制を行使し、彼らが代表する人々の意見や自らの認識を同時に斟酌して改革についても示すのです。このメカニズムによって、有権者と当選者との頻繁な思想の交流や親密さを仮定する国民は長を選びません。国民はもっと良いものを作ります。国民はそれが何であっても、調整し抑制し、今の長たちの行動を立て直すのです。

それ故に主権在民の原則がいったん敷かれ維持されたら、代議士の性質には働く習慣、先見の明、自主性があることを原則とします。もしも、悪戯っぽく管理することや穏健であることが何か明るみに出て問題であるとしても、その人が無知でなく弱くもなく甘えもなければ、怠け者、臆病者、懐疑的な者、浪費家、頭が雑でいい加減な人で急進的なレッテルを貼られている人よりも、確かに値打ちがあり役に立ちます。そしてもしも、私の選挙区で私の候補者が当選しないで、当選者が潔白な人間で仕事をしたとしても、私はそれでも忠告します。そしてもしも、私が権力の濫用とか行政の無駄遣いを知ったなら、誰の処へ行くかを覚えます。以上は、公認を受けた組織化されたその人の党派よりも、誠実さや仕事が出来るといふ人間の性質を私は寧ろ考えて欲しいと思う理由です。

(一九一一年六月三十日)

二十 高級無気力者たち (LES HAUTS MOLLUSQUES)

高級無気力者友の会の会員（年収九千フラン以上の官僚）は、特別総会に結集しており、次はその確認書です。

「第一は、民衆に媚びる政策によってわき上がる流れは、今や政府の城砦そのものが叩かれて来た。

第二は、立法者の崇高な使命を忘れていた彼らは、次第に小さな利益や下らない批判に気を取られているので、高級管理者たちは直ちに大臣たちと同じ程度に政府に質問し、大臣たちと同じ

程度に不安定である。

第三は、代議士たちが橋や車道や電話局やその他の技術分野を裁く権利があると主張するならば、それは能力ある者たちになければならない尊敬の念は弱まりそして感染して、直接的利益に従って軽率な人に全てを判断させる大衆そのものを招いている。

第四は、大衆への支出制限は今や統制された政府外で行われ、屢々政府と異なるものでさえある。代議士や大臣でさえも、触覚では分からない啓示や退廃した人気を考慮に入れずに実行することで、それを求めて見出している。

第五は、この統制の濫用は偶然ではない、学校の正常な遊びがだんだんと個人主義者やアナキストたちの情熱が大きくなって変わるのに応じて、代議士は行政機構に対する納税者や市民の支持者を手に入れるのである。

第六は、これらの破壊傾向は代議士たちの性格にはなく、寧ろ彼らの出自や教育や交際や組合員の団結心によって行政機構の上部と親しく協力する立場を取るものであり、行政機構上部の威信や特権の中で絶えず闘うことはない。

第七は、中傷というこの憎むべき精神は、代議士たちが有権者との関係から同じ原因でも、全体の利益に反して、一時的で局部的で特別な利益を手に入れるのと同じ位に過度に重要であるかの如く自分の地位を得ていると思う偏狭な従属意識から来ているのである。

第八は、それ故に政治の一般的原則について有権者たちの注意を引き戻す必要性が高くあり、従ってそれは立法権者たちを本当の機能へ呼び戻すようにして法律を制定することであり、行動や人間を裁くことではない。

第九は、選挙改革は幸いにも政治の慣習や権力の均衡を必ず変えることが出来るのである。

これらの項目のために、彼らの激励と讃辞をシャルル・ブノワ氏(1)へ送り、次の言葉だけを叫んで散会ものである、〈比例代表制万歳!〉と」。

(一九一一年七月九日)

(1) シャルル・ブノワは、中道右派の代議士で、比例代表制に賛成する国会議員の代表者であった。

(次章へ続く)

二十一 芸術と簡素 (ART ET SIMPLICITÉ)

激しく感動的な身振りで大袈裟に言っていたその道の専門家が最初に言いました、「身振りを止めなさい、それが大変美しい」。歌手やヴァイオリン演奏家に人は進んで言います、「表現力豊かにしたいのは止めなさい、それが大変美しい」。感情を強調して何かセミプロの芸術家にブルターニュ地方の民衆の歌を、押しつけにしろゆっくりにしる急がせるにしる作為的に歌わせて下さい、そんなことがどれ程僅かで控え目であっても醜いものです。思考せず試すことさえなく、リズムや言葉を自然に放って置きなさい、その結果は驚異的です。

発声法の良い先生が歌うのを見ると、如何に余分なものを取り除き、単純にしているかを理解して、何時も大変にびっくりさせられます。それは抑揚のない一定の口調でも充実しています。同様に最も偉大なヴァイオリン奏者は音が安定していて限りなく無限の弓で弾いているようです。あらゆるメロディーが大きな船のように進み、各々の音が全曲を創ります。色々なその他の音も小品になります。音楽家や朗詠者は良い形式を見て自分を創るようになります。古代の花器は如何なる装飾もありません、如何なる部分もそれだけでは美しくないように見えます。女性の服も同じです。リボンや薔薇結びを望む朗詠者がおりますが、良く言われているようにそこには思考することも意志も心づもりもありません。芸術家は熱望しません。あるいは寧ろ完璧なことは何もないから、彼が望んで探求すればする程、私には興味があります。しかしそれは、彼が私や彼のことを最早考えない時であり、それが素晴らしいのです。

詩人の芸術には詩人が知らない秘密があります。美しい詩句というものは簡素で統一されていて、目立った言葉が一つもありません。奇抜な珍しい表現はそれらを台無しにします。「三人に反対してあなたが創ったものに、あなたは何を望んだのでしょうか。死であった」(1)。もっと単純にそのことを言うのは不可能です。しかし、色々なその他の言葉の中で一つの言葉が現れて、名誉とか驚きを生むと、その行は台無しになり、美しい花器は砕かれます。ユゴーやヴィニーに、あなたは私が今言ったことの証拠を数えきれず発見することでしょう。取分け、ユゴーにおいては多く発見することでしょう。何故なら、あなたはそこに二通りのやり方を理解するからです。崇高であるための意志と、それ以外の意志です。

その上に、単に情熱の中に美を探すと騙されます。しかしながら誰も、深く悲しませたり怖がらせるものを愛さないのは明らかです。恐怖を覚えたり我慢するのは、大変に自然な原因によります。しかし、美的感動は何時も解放感であり自由であり喜びです。私たちには、全ての力を和解させた楽な働きが必要です。私たちの生活は、突然に自分自身やあらゆる物と一致します。悲劇にあるような何かの災難がなければなりませんし、没落したマンフレッド(2)とか、馬勒で馬に引っ張られるようなナポレオンとか、夜の孤独とか、大洋の激しい動きのようなものがなければなりません。しかし、私たちが突然に神々になるのは決して恐怖や絶望からではありません。

その反対です、何故なら恐怖や絶望は絶対に負けるからです。期待して待つことと反対であるからです。

(一九一一年七月十七日)

(1) コルネイユの悲劇『ホラティウス』第三幕・第四場のホラティウス三兄弟のうちの長兄の台詞。

(2) マンフレッド(一二三一～一二六六)は、シチリアの王(一二五八～一二六六)で、ドイツ皇帝フリードリヒ二世の庶子であった。悲劇的な人生を送り、ロバート・シューマンの作品に影響を与えた。

二十二 食べている馬たち (CHEVAUX MANGEANT)

馬たちが鼻に燕麦の小さな袋を吊されて、全頭が車輪に繋がれて食べているのを私は見ました。馬たちは誠実そのもので仕事に励んでいました。馬たちは列の先頭にいました、というのも五、六頭で重い馬車に繋がれていたからです。屢々、頭を激しく揺すったかと思うと地面に小さな袋が着くまで下げました。この様にして馬たちは燕麦を噛み砕きます。しかし、他の馬はもっと楽にしています。轆(ながえ)に繋がれた馬は、轆の上に小袋が置かれていて、不自由なく食べていました。又、他の馬たちは引綱を半分程ぴんと張って同じ様に食べていました。結局、馬たちは一頭一頭が状況に合わせていましたが、軽薄さは微塵とも感じられませんでした。もしもこの先頭の馬たちが注意力や知性を示していなかったなら、最早私にはそれらの言葉に与えるべき如何なる意味も分かりません。しかしながら大変に真面目で注意深く器用で力強いこれらの馬たちは、請負業者のために働き、決して釈明を求めません。

酷暑の時期には、私もあなたのように冷たい物を飲むようになります。そのことは燕麦を食べる馬の重要性を私に分らせてくれました。それらの喜びは全て思考を埋没させます。あるいはもっと正確に言うなら、それらの喜びは全てを支配し、満たし、その時に満足させます。そこでは三日三晩の宴会があります。通りにまでテーブルが幾つもありました。一人ひとりの人間が馬になっていましたし、熱心に食べました。そこにいる馬たちには働かせる請負業者が何故いないのでしょうか。彼らは少なくともお腹が一杯になっているかの釈明を求めるのでしょうか。

私がそんなことを考えていた時に丁度、紙で出来た提灯に火が灯り、音楽と踊りになりました。夕食をする人々は何かの拍子をとって頭を動かし、そして最早続けられなくなって立ち上がり、歩き出し、音楽に合わせて走り出し、大変に熱心で朝まで殆どの人々が疲れて仕舞います。

私は他にも花火を見ました。それは既に或る種の音楽でしたが、両眼のためでした。火による巨大な蜘蛛の巣が大空に広がり、白や青や赤や雨となり、幾つもの太陽となって火の滝になります。群衆はそれでも、他の色のものを見たくて仕方ありません。楽しみで一杯です。沢山の人

々が何時間も前から立ち続けていますが、この楽しみは他には何も代えられないものでした。馬たちはそんな人間たちを軽蔑するのでしょうか。

しかしながら、馬たちを管理するのはこの種の軽薄な人間たちであり、その結果、馬方は誰も人間を管理しません。暴君たちは見世物を見逃しませんでしたが無駄でした。見世物や娯楽への欲求は飽くことを知らないのです。人は全てを知りたいし、音楽の中で生きたいのです。つまり共通の法則に従いたいのです。そして、正義が或る日支配したとしても、それでも花火を見るように、最後の農民は独り言を言うでしょう、「私はそれを見ないで死にたくない」。

(一九一一年七月一九日)

二十三 文化 (LA CULTURE)

〈文化〉についての全ての話には隠された真実があります。多くの人がそれを感じていますが、はっきりと気付いている人は少ないです。以下はそのことです。ソルボンヌ大学は小学校と同じ様に、同じ間違いをしており、弊害も同じです。それは事物による授業のことで、観念による授業に代えたがっています。耐え難い勉強が至る所で行われ、判断力が無く、本当の注意力さえもありません。

学校では、余りに早く観念を育てる恐れが多くあります。愚直な人々が発見したことは、小麦の穂、林檎、兎、箒そしてバケツを子供たちに見せなければならないことでした。何時も両眼の対象物とすることであり、単純な描写とすることです。というのも彼らは、子供には先ず観察することを教えなければならない、と言っていたからです。無感覚の段階で具象から抽象へ行かなければならないのです。でもこの教育法は馬鹿げています。

先ず、子供は大変に良く観察しますし、屢々先生よりも良く観察します。実例は沢山あります。そこからは密かな冷笑や研究への軽蔑を、最も有能な頭脳の裡に生む可能性があります。というのも最も有能な頭脳は、最良のものを期待し、少なくとも彼らの弟たちに敢えて教えようとし、貧しさしか理解しないからです。しかし、有能な頭脳でいましょう。群の羊を考えてみましょう。群の羊は座っていて猫を見ます、猫の尾、猫の両眼、兎の両眼、小麦、水車そしてパン屋の少年を見ます。そして真理という非常に馬鹿馬鹿しい概念を理解します。群の羊は何時も座った儘、両眼と両耳を開けて、間違えないで、汚点もなく、輝きもなく、二足動物が人間を見分けることを生む精神の跳躍もなく、他のことに対しても一のことを教えることしか重要でないと信じています。そこにはペタンチズムの土壌があり、教えるべき多くのことがあると信じるべきで、鎌で刈ったり木靴を作るように毎日少しずつ教えることが出来るのです。何であろうと私が樂しか見ないことは、古代ギリシアの数学者タレスやピタゴラスを驚嘆させた簡潔な関係に、その

子の精神をもっと早く投げ入れることです。人間の影が人間に等しい時刻は、樹木の影も樹木に等しいのです。従って私は突然、具象から極端な抽象へ考えが行きます。その次に再び降下して、もっと多くの事物を理解するのに応じて多くの事物を観察することを知り、それを望みます。

私は、ソルボンヌ大学の学生たちには言うべきことが沢山あります。それというのも、彼らは先ずバルザックについて全てを知りたいと思っているからです。従って、権威に反抗しない者たちは書物を捨ててノートを取りますが、まるで宝石の原石を割っているかのようです。愛も喜びも去って行きます。私は反対に、彼らが先ず最良の作品や最も人間的な作品や感動的な作品を読み、そして繰り返し読んで欲しいのです。その次には詳細まで知るといふことの情熱が齎されます、何故なら若い儘で愚かで退屈することがなくなるからです。

(一九一一年七月二四日)

二十四 ランソン (LANSON)

マケドニアの王アミュンタス(1)は、皆がそうであったように若かったのです。そのような場合、彼は一般的な良き小学生よりももっとしっかりといて真面目な処を見せますが、若い処も見せます。つまり些細なことを軽視し退屈し、偉大な作家のものを読んで感動しますが、まさしく赤裸々な精神や無邪気さによれば彼は若者の段階にあります。しかし、誰にも自分の青春があり、子猫はライオンの子ようには遊びません。アミュンタスは生まれながらの批評家でした。彼は本を読んで熱中しました。彼は正確に見抜きました。人間の描写に優れていて、生き生きと正確で誰にも真似が出来ない表現であるかの如くでした。そこには精神の爪跡が記されていました。一言で言えば、二十五歳で余り若くなくなり先生に成ったのです。恐らく彼には所謂、心とか力強さがなくなったということです。恐らく、彼の投げ槍は標的を外すのを心配していませんでした。彼は曲芸師のように正確に矢を放ちました。要するに、少しか細い観念ですが、大変に明瞭です。そして、それらの観念が行為を呼び寄せる時、彼は読んで読んで読みました。アミュンタスがこの立派な時代のことを考える時、「悲しいかな、私は何も知らなかったのだ」と彼は言いました。

純文学の職業に就く時、驚くことに飽きるようになり、小さな原因から大きな結果を意識的に説明するようになり、コルネイユ弁護士はコルネイユ悲劇作家になります。それは批評家の更年期です。あるいは五十歳の時にプラトンを発見して若者の本を書いたファゲ(2)のように精神が素朴でなければなりません。しかし、アミュンタスはそんなにも力強い心を持っていませんでした。彼は麝香の香りや高価な物の中で歳を取る、大変にヴォルテール主義の精神を持っていました。かくして彼は博学に陥りました、丁度ソルボンヌへ入った時です。

彼はそれ故に探し出す名人でした。そして、彼は他人の仕事解体し始めますが、まさに自分のものを創る時なのです。というのも誰もが彼のものを知った後に、別の人々の作品を説明するからです。別の人々が彼のように読み、彼のように思考したと彼は仮定しました。そこには道があります。旅行中のヴォルテールの後に続いているのです。そしてもしも偉大な人間が、秘密の場所で何かの裁断された原稿を読んだなら、アミュンタスはこの原稿が何故裁断されたのか、そして偉大な人間が我慢していたのは如何なる思想なのかを知らなければなりません。彼は一緒にその町で夕食を食べます。彼は立ち聞きします。二百年前に行われたこの会話を聞きます。彼は、それらの思想をレースのように解きます。糸を解いて行きます。もしも糸が切れれば、両方の端を探します。創るのが楽しく、続けることさえも楽しいのは驚異的な仕事であり、彼は今、その原則と規則を表現しています。もっと具合悪く終えることも出来ます。そしてもしも幾つかの小さな原因が全てを説明しなかったなら、それらは大切なものを明らかにするようになります。それらは説明出来ないものです。アミュンタスは幸せな人間です。彼は長く模索した後で、最後に若者に適した勉強方法を見付けたと思ひ込んだのです。

(一九一一年七月二七日)

(1) アミュンタスとは、批評家で文学史家のギュスターヴ・ランソン(一八五七～一九三四)のことを指し、歴史的比較的方法を文学研究に導入した。

(2) エミール・ファゲ(一八四七～一九一六)は、文芸批評家でニーチェをフランスに紹介した。

二十五 精神生理学 (PSYCHO-PHYSIOLOGIE)

鶏小屋で記憶を研究するために人は全生涯を捧げることも出来ます。如何にして自分の学習に気を付けた鶏を手に入れて覚えさせようとするのかが自問されます。容易なことは何もありません。もしも段ボールの上に規則正しく小麦の粒を置いたとしても、その鶏が何かを学んだかどうか私には分かりません。しかし二つの粒のうち一つを糊でくっつけて持ち上げられないなら、そこは鶏が学習する学校になります。というのもその鶏はその配置を記憶に留めるようになり、最早嘴で不必要につつくことがなくなるからです。しかし模索や間違いが行われなければ、その様になることはありません。殆ど終わりの無い探求の場がそこにあります。というのも私には、その鶏の間違いのための統計学が生まれるからです。私はその鶏を変えることになり、一時間には一時間の経験が生まれますし、二時間には二時間が、一日には一日が、一週間には一週間の経験が生まれます。そして二年とか三年後には、私は鶏の記憶を最も良く知った人間になります。

もしもこの地位が既に取られていたなら、あなたは未だ良く知られていない何か別の分野で発見するのが悪くないでしょう。あなたは食物を仕舞ってある籠を開くには非常に単純な掛金をしなければなりません。猫、犬、鶏、鳩、二十日鼠が偶然にもその掛金を開けるようになれば、何回かの試行錯誤の後にはそれを開けることを認識します。もしもあなたが動物、掛金、その経験の時間的間隔を変えたならば、何回でも見事な結果の表を仕上げることになるでしょう。

その迷路の方法は、平均的知能でも理解出来るものにします。あなたは迷路を作ります。つまり仕切りと通路で多くの袋小路があります。その先端の終わりには食物があり、始めの端には動物がおります。あなたはその動物が犯す間違い、正しい通路に戻るのにかけた時間、それに必要とした実験の数を二十日鼠、鼠、猫、鳩、川ハゼごとに書き留めます。勿論、川ハゼは出来ればですが鯉科のタンシュもいれば、鱸科のパーチも鱒もおりますし、色々な年齢にします。蛙も蟾蛙も蛇もおります。そして、もしもあなたが何かの心理学の雑誌に原稿を送るのに力を貸したなら、小さくても栄光を手に入れますし、あなたのことを人々は次のように言います、「確かなことが良く分かったものだ。それは本当らしいことを全て長々とお喋りすることよりも価値あることだ」。でも少なくとも、もしも私があなたに戦争や権利や法律や吝嗇やその他毎日使っている人間のものを私に明示するように求めたなら、あなたは眼鏡を紛失した近視の人に似て何も正確に分かりません。

これらの例は決して私の作り話ではなく、若者たちに思考させるために先生たちが教育する重荷になっている〈高等教育〉が、如何にその本質的機能を本心では軽蔑されて大変良く忘れることさえも出来るのかを、理解させてくれています。思考は贅沢なことです、貧しいことでもあります。

(一九一一年八月二日)

二十六 宗教と権利 (LA RELIGION ET LE DROIT)

「神を信じる者たちは愚か者である」。或る小学校教師のこの言葉を昨日私に引き合いに出したのは、小学校教育が情感や敬意に欠けていることを理解させるためでした。偉大な性格で深い判断力をもった女性は、カトリック教徒になりたいと見倣されていた有名な哲学者のことを、次のように言いました、「その時は狂っているのです」。彼女は次のようにも言いました、「人は何かによって宗教を継ぐことを尋ねます。私は答えます、人はそれを継ぎません。人は間違っているものを継ぎません。それを禁じます」。彼女は屢々、宗教で最もありふれた効果は私たちの最も明白な義務を隠して言わないことにある、という考えに戻っていました。「この世に正義は決してなく、人類が生むのは正義とは別である」と彼女は言っていました。これらの印象深い言

葉は、私自身に通り一遍以上のものを思い出させました。悪が何時もこの世では勝ち、正義はあの世へ追い払われると教える者たちを憎まねばなりません。私は、幻想を諦めて偽善を歌う歌を聞いたことがあります、偽善を甘受してお金を稼いだり、あらゆる方法で権力を手に入れたりするのであり、人間とは美食家で、喧嘩好きで、不公平で、本質的には無知で、そして何も出来ないと彼らは言うのです。私はこの重大な人間嫌いや、宗教を私に教えた彼らの裡にある臆病者の諦めを良く見抜きましたが、それは私にとって恐らく顔を背けて来たことです。神を信じるにも愚かな方法があるのです。

しかし、全くの愚か者は何人もいないし、間違いというものは隠された真実を閉じ込めているとも言えます。権力者が鞭を使う時、犬は身を隠します。しかし、如何なる人も多くの鞭の使用を正しい理性と見做しておりません。人間というものは権利と行為を区別しており、行為を忍従し権利を尊重します。そうです、最近の暴君でさえ、寓話の狼のように十分に理性的でありたいのです。誰もが他人の不正に反対し、不正そのものに反対し、そうあらねばならないことに任せます。ビー玉を取り上げられた未だほんの子供だった頃は、所有が所有権と同じでないことを良く分かっています。これらのビー玉が、実際にそれらを取り上げた人のものであることを彼は大変良く分かっています。行為は力によって決定し、権利は合理性や理性に従っていることを彼は大変良く知ります。ところが〈力〉に反対する呼びかけは理性のための呼びかけであり、その奥底には祈りというものがあります。宗教というものは力に反対することを要求します。宗教というものは革命です。それは私たちの問題であり、神とは正義であると私には見えますし、星々のある大空は権利という秩序の大変に明白な象徴を示しているように私には見えますし、如何なる暴君にも変えられません。宗教が何時も形式とか、他のものに基づいて何時も生まれるということは、抗い難いこれらの考えによる美德を通してです。そして、崇拜というものは何時も〈価値〉を保存することに戻るものであり、〈力〉ではありません。もしも系統立って執拗にこの〈権利〉という〈宗教〉を人が教えたなら、〈偉大なる和解〉が生まれます。しかし、心の底では何時も〈力〉と共に侮辱と憎悪があり、〈権利〉に反対しています。

(一九一一年八月四日)

二十七 機械の間違った概念 (NOTION FAUSSE DES MACHINES)

科学的様相を呈している小説の全てに、私は何時も機械とそれらの力に関する同じ間違った概念に注意します。英国の小説家ウェルズは『世界戦争』において最早、脳も両手もない〈火星人〉を描いています。機械で動き、何時も単純な市内電車の運転手のようで、走って闘う鋼鉄の巨人になり、空飛ぶ機械になり、他の機械を産み出す工作機械になり、恰も機械が私たちから筋肉

を使う肉体労働を免除したかのようです。ところで彼には虚構が許されていますが、事実を教える何かはなければなりません。人間産業の問題においては、指導する人間や働く機械には何も予告しません。反対に現代の産業には嘗てない程に辛く、迅速で、疲労させる人間の労働という様相を見せています。そして人は良くその理由を理解しています。機械はそれだけでは生まれません。鉄は手の届く処にありません。石炭もありません。石油もありません。昔より強力な機械があるのは、勿論です。しかし、人間も昔より沢山働いています。村の鍛冶屋と工場の労働者を比べてご覧なさい。

人間には非常に強力に従順な鋼鉄で出来た奴隷がいる、と私は敢えて言います。それは機関車であり、自動車であり、取分け雲の上へ昇って行くぶんぶん言う大きな蠅でもあります。しかし、七十時間後に飛行機のエンジンは燃料切れになることを覚えて置かなければなりません。そうです、燃料切れです。くず鉄になるのでしたら良いでしょう。ところでそこに閉じ込められた労働を考えて下さい。鉄に消耗されて、次に石炭の鉱脈で働く人です。井戸、ウィンチ、ポンプ、トロッコ、運搬車を考えて下さい。高い炉や動力ハンマーを考えて下さい。油井や石油の運搬や蒸留を考えて下さい。多くの力を非常に小さな容量である一人に小さくするまで、全体を押し進めていた労働者の群を思い出そうとして下さい。そして、全体は七十時間のうちになくなります。この大きな島は海を渡り、何千人もの人手によって支えられています。それは高貴な遊びではなく、隠れている労働者たちが人間の島に喝采する時、最早人間を感じていないと私は言いません。しかし彼らがその時、感じているのは精神でもあれば筋肉でもあり、技術者でもあれば頑固者でもあります。筋肉に代わる機械を用意させるものは何もありません。そして、最高に良いメカニズムは今まで、蓄積された筋肉の働きでしかありません。人間は、人間の腕で空を飛ぶのです。

(一九一一年八月八日)

二十八 変わりやすい品性 (INSTABILITÉ DES MONEURS)

専制政治はそのものを食べます。自由そのものを食べます。戦争そのものを食べます。残酷そのものを食べます。一度切りのものは、長く継続させるために最良の力を持ちます。私たちの観念や感情は、直ぐに私たちの行動と適合させると私は言いたいのです。可能事では何も生みません。しかし、現実の風は飛行機のことを考えさせました。同様に、現代の共和国も初めは壊れやすい玩具でしかありませんでした。偶然の産物です。それは君主制から分割して生まれ、プロシアの勝利後のものであると良く言われて来ました。しかし、大事なものは何時も、その初めは小さなものです。人民は君主制の中で生活し、そして思考し、共和国を愛しますが、それは自然

に反します。実践によって理論に行きます。君主制の中での思考は、君主制的になります。戦争の中では好戦的です。集団へ行く者は、集団的思考を取ります。お金持ちになった者は、お金持ちの思考を取ります。病人は病人として思考します。食事を取るように水薬のことを考えます。変化することは不可能のように見えます。しかしそれが行われる時、それが原状であり、あるいは最早不可能のように見えなくなります。

私の祖父の祖父がこの問題を想定することが出来て判断を下せたなら、彼が犯人だったのかどうかを知るために先入観を持っている者の骨を砕かせていると理解して下さい。しかし、それが私という人間だったのです。確かな行動の中に正義があり、残酷や粗野はそれ以外の中にあります。風習に従えば冷酷であるか優しいかであり、そして誠意は何時もあります。私たちは子孫が私たちのことを考えると理解することが出来ません。

私たちは拷問を理解しません。しかし、それは一世紀半前には行われていました。そして思考は、行動の次に来ました。それ故に宗教が長く続いて来たことを言うのは、宗教に気に入られている大変に悪い証になります。そしてパスカルが次のように言うのは大変に正しいことです、「実践せよ、そしてあなたは信じます」。勿論、私もそうだと思いますし、それ故に私は実践したくありません。認可というものは証明に値します。形式への敬意は、直ぐに心からの敬意になります。機械は理論よりも早く動きます。私は一度も会ったこともないこの人間と共に磨かれました。私は既に彼を愛しています。人は次のように言います、「私はもう彼を愛している、何故なら私は彼にも私にも満足しているからである」。しかし、理性は次にやって来ます。私の最初の挨拶が全てを決定しました。私たちの偏見は決して思考されたものではなく、それは行動です。もし私たちが一度逃げ出したら、私は怖くなります。もし私が一度非常に低くお辞儀をすれば、私は平凡になります。もし私がお金を賭ければ、賭博好きになります。もし私がお酒を飲めば、酔っ払いになります。薬がない訳ではありません。もし私が一度お酒を飲むのを断ったなら、私は上手に節制する人にもなります。私たちの心は平安であり穏やかです。戦争になれば、人はそれに身を置きます。だんだんとではなく、直ぐにです。この考えに悩みはありません。それは反対に元気づけ活気を与えます。私たちは起きたこと全てに責任があると感じ、向上を齎す者になります。そして地面に重荷を置いて役立たずになるのは止めましょう。一分でも置くのは止めましょう。

(一九一一年八月十三日)

二十九 ユゴー、バルザック、スタンダール (HUGO, BALZAC, STENDHAL)

ユゴーはスタンダールを愛しませんでした。ユゴーはスタンダールの文体を拒んでいました。私は

彼ら二人とも愛します。そして、私は告白しますが、ユゴーを大変長く愛してきましたし、殆ど何時もです。彼の本を毎日読んで過ごして来ました。私はユゴーの考えを良く理解しています。彼は殆ど何時も庶民の思想を発展させていましたが、それは人を感動させるものであり、正義、思いやり、誠実、勇気、博愛の思想です。ユゴーはその思想を理屈抜きで発展させます。決して何も付け加えません。只、私たちを感動させるだけです。ユゴーは文章によって活動せねばなりません。彼は前進し、そして又前進します。彼が書いた作品が言っているのは次の言葉です。「私は前進します。私は前進します。そして、次も私は前進します」。それが何処へ前進するのか分かりませんが、それは美しい場所の一つでもあります。人が軍隊について行くように、私はユゴーに従います。そして、美しい場所が私を出迎えてくれます。多分、それは自分で読むことが必要です。それというのも、そのときは想像力が逃げ出して何も湧いてきませんが、リズムがめちゃくちゃになることはないからです。もしも複数の人が聞くとするなら、人によってこの一致と不一致は尋常でない者を生みます。雄弁家です。詩人たちにとっては、作品を紙に印刷する代わりに暗誦して貰ったならば、大変な栄光を手に入れると私は信じます。リズムは時間を計ります。それは規則正しい速さを仮定することですが、本を読む者の眼はそのようなことにはお構いなしです。多分、人々は将来ルメール店で蓄音機を買うようになるのでしょう。詩人は人前に姿を現さないでしょう。単に声に出して言うだけです。

雄弁には法則があります。それは事物と同じように自然のものです。何故なら、聴衆は話を元に戻すことが決して出来ませんから、繰り返して言うことがより一層有効です。如何なる場合でも人々は、話の全てを感知出来ることはまず無いからです。同様に、話の全てが明瞭でなければなりません。何故なら、聴衆には熟考するための時間は与えられていないからです。話は誰も待つことなく進められ、時計の針のように話は時間そのものを刻んでいきます。眼で本を読む者は、進んだり戻ることが出来ます。全体を把握して最初に見抜き、次に分析して苦勞して読む価値があるか否かを判断出来ますが、それは散歩をする人が周りを眼で見るようなものです。そして、全体を見なくても作品を読んで行く眼は、一定の速さにも、時間という秩序にも気にしないで済みます。その他のジャンルの本を読むことは、詩とは違った朗読という方法の良さを持っているに違いありません。しかし、朗読に全く適さないと言われるスタンダード作品は、その良さを理解するのは難しいでしょう。彼の作品は刻一刻と絶えず読み直していかなければなりません。何故なら、彼は決して繰り返して書きません。くどくどと書くこともありません。それは遠くから見た風景のようなもので、近づけば近づく程、色々と発見します。それはリズムの世界にはないことです。リズムが何かを導くことは決してなく、導くことを望んでいません。もしも導くとするなら、自らの芸術とは反対の方へ行くのかもしれませんが。そこからユゴーという雄弁家は、このことを何も理解していなかったことが私には分かります。バルザックは、スタンダードとユゴーの中間にあります。雄弁とは反対側にはありますが、それは眼で見ただけです。刻一刻と変わるものも読み直して行かなければなりません。しかし、そのとき彼は簡潔な述べ方によって、全体を一つの言葉に翻訳します。読むのに時間がかかると、時として意味が拡散しますから、驚く程に簡潔な描き方の絵画に一つの思い出を込めるように書きます。スタンダードの場合は反対です。カルトウジオ会修道士の描写を見れば分かります。或いは私が読んでみると、事細かに描かれた挿話は幾らでも沢山あります。もしも私が読み直すとすれば、半頁に一つ位見つかります。二行ごとにあることも屢々あります。この芸術作品は、雄弁なくしては生まれることがありません。それは教会の説教師たちが良くやる方法で、くどくどと無駄で余計なことを言う表現方法は彼にとっては優しさなのです。スタンダードは多くの曖昧な言い方を否定しているように見えるでしょうが、彼には曖昧な時もあります。しかし、そう

言うのは寧ろ失礼です。眼と耳はお互いに良く話し合うことです。

(一九一一年八月二六日)

三十 私たちの未来 (NOTRE AVENIR)

あらゆる物事の関係や、原因と結果の連鎖を良く理解しなければいけない程、未来に悩むことになります。夢想とか魔法使いの言葉は、私たちの希望を殺します。その前兆はあらゆる大通りの中にあります。それは神学的観念です。家が倒れて死ぬということを予言した詩人の寓話は、誰もが知っていました。詩人は美しい星に身を置きましたが、神々は決して放置したくありませんでした。鷲が小石の代わりに亀を捕まえて詩人の禿げた頭の上に落とさせたのです。神のお告げで、ライオンによって死ぬことになる王子の話もあります。王子は女官たちと一緒にいて家から離れなかったのですが、ライオンを描いたタピストリー（壁掛）に腹を立て、具合悪く釘で拳を擦りむいて、壊疽で死んで仕舞いました。

これらの話が生まれる思想は宿命であり、神学者たちが後になってから教義に入れたものです。そして次のようになります、一人ひとりの運命は行おうとすることを決定します。決して科学的なものが全てではありません。そして、この宿命論は次のように言うことになります、「原因が何であろうと、その結果は同じことになる」。ところで、私たちはもし原因が別々のものなら、その結果も別々になることを知っています。そして次のような理性の働きで、必然的な未来という亡霊を私たちはやっつけます。私が壁に押し潰される日と時間を知っていると仮定してみましょう。この認識はまさしく予言であることを忘れさせます。かくして私たちは生きて行きます。一瞬一瞬、私たちは不幸から逃れます、何故なら不幸を予想して備えるからです。従って私たちが予想することは大変に合理的であり終わりがありません。もしも私がこの考えの道の真ん中に残されたなら、この不幸の自動車は私を粉々にします。しかし、私はそこに残ることはありません。

運命へのこの信仰は何処から来るのでしょうか。基本的には二つの源泉があります。先ず一つ目は、恐怖が私たちの予想している不幸に屢々投げ込むのです。もしも人が私は自動車の轢かれると予想したなら、そしてその考えが調子の悪い時にやって来たなら、大したことはないとするだけで十分であり申し分ありません。というのもその考えはその時の私には必要であり、それは私を救ってくれる考えであるからで、その時から救う行動が直ぐに継続するからです。反対に、そこに私が止まっている考えは、同じメカニズムで私を麻痺させて無力にします。それは或る種の眩暈であり、魔法使いたちが財を成したものです。

私たちの情熱と悪徳は、全ての道が同じ目的へ行く多くの力を持っているとも言わねばなりま

せん。賭けをする遊び人、お金を貯め込むけち、熱心に求める野心家になると予言することも出来ます。

いや寧ろ魔法使いでなければ、私たちは自分自身のために運命を捨てて言うのです、「私はこういう者だ。何者でもない」。それも又眩暈であり、予言が成功していることでもあります。もしも私たちが身の回りの変化の連続を良く知っていたなら、小さな原因による連続した開花や変化は、十分に運命が生んでいるのではないのです。ルサーージュの小説『ジル・ブラス物語』を読んで下さい。重要なことは何もない本ですが、良い運命も悪い運命も当てにする必要がないことを教えてくれています。勿論、気球の砂袋を捨てて危険を逃れることであり、風が運ぶ儘になることです。そうすれば私たちの間違いもなくなります。ミイラにしてそれらの間違いを残すのは止めましょう。

(一九一一年八月二八日)

(次章へ続く)

一ノルマンディー人のプロポIV
【2013年9月号】

<http://p.booklog.jp/book/75738>

著者：アラン （翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75738>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75738>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ